

ブラームスの「2つのラプソディー」、ピアニストにとって特別な作曲家と聞く。作品110番台の後期の20曲では表現し尽せぬ熱き想いを2曲に託す、ソナタだったらオオゴト過ぎて大変な作業になるのか。若さ、未熟さ、劣等感、未解決の永遠のテーマ、向こう見ずな若々しい野心、洗練されぬ厚ぼったい情熱、粘着性。作曲家に対しブツケタ気持ちをありのまま表現、キレイゴトでなく、未整理のままストレート。つい7、8年前のコト、その情熱を窺い知り、生々しい迫力に黙るだけ。この曲、私にとって、ディノラ・ヴァルジさん、グリモーさん、カトリーヌ・コラールさんの演奏が印象的。

リストの「コンソレーション3番」。昔ライブで誰かの演奏を聴いた様な。冗漫な感じを受け、私にはピンと来なかった、聴ける余裕、体制になかったのだろう。今日の演奏はゆったりとしみじみ、好さを教えてもらった様でシアワセに思う。超絶技巧の如く、大見栄張ってのアクロバティックな要素や、「愛の夢」的ロマンチック志向でナシ。曲が持つオーラによる受動でなく、「孤独の中の神の祝福」の様な此方から働きかけのモノ、自分の内面を吐露するコトで癒されるのか、メンタル的充実感の確立。

ドビュッシーの「喜びの島」。イキイキ躍動、カラフル色付け、研ぎ澄まされて、クリアランス。一朝一夕でなく、トライ・アンド・エラーの賜物。こうあらねばという重枷希薄、自由奔放・自由自在、喜び満面。「のだめ」の主人公でなく、ピアニスト・オリジナル、イマジネーション・ワールド。持っている全てを総動員、届託なくハイテンション、リズミカルでヴィヴィッド。妖しい雰囲気・エクスターも、背伸びでなく大人の説得力。今船出、新鮮な喜び、ワクワク期待感。アップデイトの超モダーンな魅力、1世紀を迎えた曲とは思えぬ。日本海海戦や相対性理論の頃、アナクロニズム又は別次元、いずれも違和感、ドビュッシーってそんな存在。

ショパンを聞くと安心感。「バラード1番」は大きく舞う、クライマックスに向けて、何度も重ねる理由付け、律儀さがユニーク。「幻想即興曲」、素直なアプローチの畳み掛けにホッ、ポピュラーへの耽溺ナシ。そして、想定外の音の処理にニヤッ。(2007.7.31)

ベートーベン：ピアノソナタ8番 ハ短調 Op.13「悲愴」>

ブラームス：2つのラプソディー Op.79

ショパン：バラード 1番ト長調 Op.23>

ショパン：幻想即興曲 嬰ハ短長調 Op.66

リスト：愛の夢 3番 G.541-3

リスト：コンソレーション 3番 G.172-3

ドビュッシー：喜びの島

---

(アンコール)

ショパン：ノックターン 20番 嬰ハ短調 Op. poth

プラームス：ワルツ Op.39-15

---